

「靈なる神のすまい」

イザヤ書  
エペソ人への手紙

第57章18節～19節  
第2章11節～22節

説教 岡村 恒牧師

「靈なる神のすまいとなる」(22節)。聖書が語るの、願望や推測といったものではありません。明確な宣言です。主イエスを信じ、洗礼を受けた者は、キリストに結びつけられて神のすまいとなる。聖書は驚くべきことを断言します。全地をお造りになり、支配しておられる神が、私たちの内に宿り、そこで生きて下さる。こう言って聖書は、私たちの人生の終着点を、はっきりと指差しています。

日常生活の中で、私たちはこれから起こることを予測し、期待して歩みます。しかし一番最後の終着点について、私たちは自分で決めることはできません。聖書にその終わりがはっきり書かれているからです。すべて目に見えるものが終わりを迎える時が来ます。神の民がみ前に集められる日が確かに来るのです。

今朝の御言葉は、神と無関係であった者が、神に結び合わされて、その日、終わりの日に神の者として神の前に進み出ると約束しています。「かつて」と「今」を比較しながら、私たちの救いについて語ります。以前の自分が、ほんの少しましな人間になって生きるとか、人生を少しだけ意味深く生きる、といった改善の話はどこにも出てきません。完全な逆転、180度の方向転換の話だけが語られます。

かつて、多くのものを手にしていると思っていた私たちが、神の前で握りしめた手を開いてみると、そこには何も持っていなかったことが分かります。キリストを知らず、神の民の国籍もなく、救いの契約とも無関係で、希望もなく、神もなかった。何一つ手にしておらず、神の国とは無関係であった。これがかつての私たちの姿だったのです。聖書はこう語って、神なしに生きる人間がどれほど絶望的な姿をしていたか、を描き出します。主イエスは、ご自分の元に来り集まってきたこのような群衆をご覧になって、「飼う者のない羊のよう」(マタイによる福音書 9章36節)だと深く憐れんで下さいました。そしてこの羊を命へと導くために、ご自分の命まで与え尽くして下さいました。

エルサレムの神殿には、人々を隔てて分ける壁があり、神殿の中には人と神の間に立ちただかる隔ての幕がありました。遠くの者が神に近づくためには、壁の門をくぐり、幕を通らなければなりません。神の民とそうでない者の間には深い断絶があり、会話を交わすことさ

え許されませんでした。そこに主イエスがおいで下さり、私たちと神様との間の隔ての壁、隔ての幕を取り除いて下さいました。私たち自身の罪と汚れとが、私たちと神様との間の隔ての壁となっていました。主イエスは、ご自身の命によってこの壁を取り除き、私たちを神様と和解させて下さいました。神様の敵であった者を、神ご自身が「私の愛する子」と呼んで下さるまでにして下さったのです。主が私たちのために祈り、血を流して下さいました時、私たちが神様のものとされる道が開かれたのです。

主イエス・キリストの到来によって、世界全体は根底から変わりました。私たちと神様との関係が全く変わってしまったからです。それと同時に、この世界で生きる人間同士の関係までもすっかり変わってしまいました。神様によって、遠くにいた者が近くのとされ、何も持っていなかった者にすべてが与えられたのです。主イエスと共に結びつけられ、共に神の国の国籍を持つ者とされたからです。

ヘブル人への手紙には、信仰を抱いて死んだ人々が、天に国籍を持つ者として死んだ、と記されています。地上では異なる場所で生きていても、同じ神の国の国籍を持つ者同士が出会うと、そこに確かな交わりが生まれます。教会は神の国の〈大使館〉です。そこに集う時、私たちは帰るべき一つの故郷を望み見ながら、母国、神の国の言葉を口に、神の国の歌を歌います。大使館には、神の国の香りが満ちているのです。

私たちは、確かな土台である主イエスご自身の上に、お互いに組み合わされて一つの建物に建てあげられていきます。同じ国籍を持ち、一つの命を生きる者同士が離れ難く結び付けられて、主ご自身に根底から支えられる人生を、共に歩んで行くのです。

あなたがたは「神の靈なるすまいとなる」と聖書は宣言します。主の確かな約束が、完成の日を目指しています。飼う者のない羊を発見し、連れ戻し、ご自分のものとして生かして下さいのために、主イエスご自身が、私たちの主となって下さいました。その命をもって神様との和解を与え、今も、私たちの人生を根底から支えていて下さいます。私たちは共に、主のものとして生かされているのです。

(記 岡村 恒)